

胃がんの腹腔鏡手術

開腹手術を超えたクオリティで
からだへのやさしさを極める!



独立行政法人 国立がん研究センター東病院
消化管腫瘍外科 胃外科 医長

きのした たかひろ 医師
木下 敬弘 医師

進化した腹腔鏡手術の真骨頂とは!!

腹腔鏡手術のメリットとして最もよく知られているのは「傷が小さい」ということです。

それはもちろん重要なメリットですが、現在、私たちが実感している腹腔鏡手術の最大のメリットは、従来の開腹手術をしのぐ、『クオリティの高さ』です。

腹腔鏡手術では、高性能のハイビジョンカメラが、細かな血管や神経、リンパ節の状態まで鮮明にとらえ、実際よりはるかに大きな映像に拡大して映し出してくれます。

肉眼では見えにくかった細部まで非常によく見えるため、より精密で正確な手術を行うことができます。

さらに、この手術では出血がほとんどあ

りません。

開腹手術の場合は、少なくとも200cc〜300ccの出血は免れませんが、現在の腹腔鏡手術では、超音波凝固切開装置（止血しながら切開できる手術機器）などの進歩により、出血をほぼゼロに抑えることができます。

腹腔鏡手術のここまでの発展を支えてきたのが、こういった様々な手術機器の進化。そして、外科医の努力による技術の向上です。

※現段階ではまだ、胃がんの腹腔鏡手術の治療成績が、開腹手術より優れているという結果を現す科学的データは集まっていません。そのため現在、開腹手術と比較した臨床試験が全国規模で行われています。

日本の胃がんの腹腔鏡手術は世界1!

日本は世界的にみても胃がんの罹患率が高く、肺がんに次いで二番目に亡くなる方が多いのが現状です。

たくさんデータのをもとに胃がん治療が進歩した日本における腹腔鏡胃がん手術は、間違いなく世界のトップです。

腹腔鏡手術とは、お腹に開けた数か所の穴から器具を挿入して手術を行う最先端の手術方法です。

従来のお腹を大きく切り開いて行う手術に比べ、患者さんの負担が軽い、からだにやさしい手術として、胃がんの手術でも多く用いられるようになってきています。

そこで今回は、胃がんの腹腔鏡手術のトップランナーである国立がん研究センター東病院の木下敬弘医師にお話を伺いました。

“身体にやさしい”手術とは!? ＜腹腔鏡手術のメリット＞

- ・拡大された視野でより正確・精密な手術が可能
- ・傷が小さい
- ・出血が少ない
- ・機能を温存できる（幽門保存胃切除など）
- ・美的に優れる
- ・お腹の中の癒着が少ない
（腸閉塞などの合併症が少ない）
- ・術後の痛みが少なく回復が早い
手術翌日…歩行や水分の摂取ができる
3日目……食事の開始
7日目……退院（※個人差はあります）

腹腔鏡手術

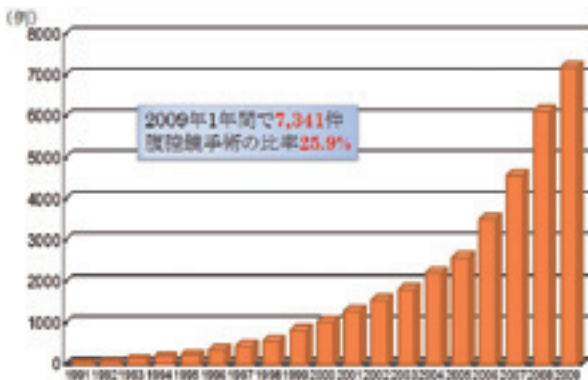


従来から行われている開腹手術



「腹腔」とはお腹の中、「鏡」はカメラの意味。腹腔鏡手術は、お腹を二酸化炭素（CO₂）でふくらませてスペースを確保し、数か所開けた小さな穴から手術器具を挿入して、モニターを見ながら行う。

胃がんに対する腹腔鏡手術の全国増加



手術による傷の違い（幽門側切除）



開腹
幽門側切除

腹腔鏡手術
幽門側切除
(LADG)

完全腹腔鏡手術
幽門側切除
(TLDG)

多くの施設で行われている胃がんに対する腹腔鏡手術では、残った胃をつなぐ腸管の再建のため一か所だけ傷を開いている。(写真中央)
木下医師が行っている完全腹腔鏡手術では、腸管の再建も胃の全摘も鏡視下で行うため、さらに傷が小さい。(写真右)

ただし、どんな場合でも腹腔鏡手術を勧められるわけではありません。
最も大切なのは安全性と根治性ですから、がんの手術では、低侵襲性（傷を小さくし機能を温存する）とのバランスが非常に重要です。

**人生をより幸せに生きていくため
求められていくやさしい手術**

現在、初期の胃がんは腹腔鏡で行う施設が非常に多くなりました。
ただ残念ながら、施設や術者による技術の差が大きいのが現状です。

「日本内視鏡外科学会」では、腹腔鏡手術の技術認定医の資格をもつ医師をホームページ上で公開しています。病院を受診する際には、それを目安にされると良いと思います。

現代は人の寿命が延びただけに、一生の間に複数回、手術を受ける方も多くなってきています。

そんな今、からだにやさしい腹腔鏡手術は、今後いつその必要性を増し、普及していくに違いありません。